



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ソーシャル・キャピタルから見た限界集落の居住環境に関する基礎的研究 : 積丹町大字西河町におけるライフストーリーインタビューを通じて
Author(s)	大瀧, 悠; Otaki, Haruka; 森, 傑 他
Citation	学術講演梗概集. E-2, 建築計画II, 住居・住宅地, 農村計画, 教育, 2009, 389-390
Issue Date	2009-08
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/43896
Type	journal article
File Information	389-390.pdf



ソーシャル・キャピタルから見た限界集落の居住環境に関する基礎的研究 積丹町大字西河町におけるライフストーリーインタビューを通じて

限界集落 過疎化 ソーシャル・キャピタル 公共サービス ライフストーリー 正会員 大瀧 悠*
同 同 同 同 森 傑**

1. 研究の背景と目的

近年、農山漁村は超高齢社会を向かえ過疎化は益々深刻なものとなり、特に限界集落においては、共同体の崩壊や公共サービスの低下から基礎的な生活条件の確保が困難になっている。このような環境では、生活の多くを個人レベルの相互扶助^{注1)}が支えていることが予想される。

本研究では、道内限界集落の中でも比較的早くから人口減少のみられる積丹町にあり、集落内の居住地が二分化し特徴的であるといえる大字西河町(以下、西河町)を対象とし、相互扶助行為を促す基盤となる住民個人のソーシャル・キャピタル(以下、SC)に着目し生活実態を把握することで、限界集落における居住環境を維持し改善する可能性についての知見を得ることを目的とする。

2. 調査方法と結果

2008年9月5日～11日にかけて、西河町に住民票を置き、調査期間中日常的に西河町で生活していると認められた7世帯10人のうち、協力を得られた4世帯5人を対象とした(表1、図1)。一日に一世帯、朝食前から夕食後の12時間程度を原則としてライフストーリーインタビューを実施し、計約54時間の会話を録音した。同時に、語り手の表情や一日の行動、遭遇した人等をフィールドシートに書き留めた。

3. 住民のSCに関するデータの抽出

調査結果より、4事例のライフストーリーインタビューを再構成し、SCに関連するデータを抽出した。本編では紙幅の都合上以下にその概要を示す。なお、個性既述に必要と考えられる語りを「」で記し、()は筆者の補足、...は中略を表す。

事例1: A [女性-74歳-無職-独居-浜西河住民]
Aは民宿Hの温泉をC夫妻と共に無料で利用することが習慣であり、民宿Hの従業員や利用客と顔馴染みになっている。C妻、Eと共に古平町のO水産加工場に勤務していた経験があり、山西河住民であるEとは勤務する前は面識がなかった。退職後は自治会等の行事や民宿Hを利用する際にEと会うことがある。他にもO水産加工場で知り合った古平町に住む友人と旅行やコンサート鑑賞へ出かける他、電話で連絡を取り合っている。

表1 西河町住民構成 (は調査対象者を示す)

世帯構成	独居	同居	夫婦	父子	母子	独居	母子	独居
仮名	A	B	C夫 C妻	D父 D息子	E	F母 F息子	G	G
性別	女	男	男 女	男 男	女	女 男	男	男
年齢	74	54	75 70	93 60	65	80代 56	54	54
職業	無職	民宿H勤務	無職 無職	無職 漁師	O水産加工工場勤務	漁手 漁師	漁師	漁師

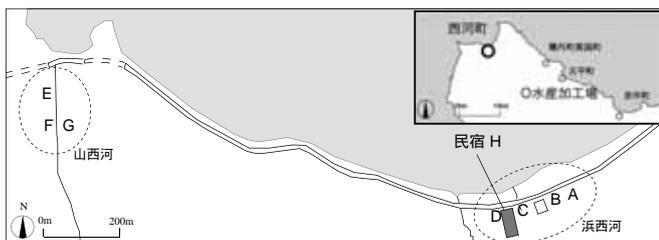


図1 西河町地図

AはD父子、Gと親戚関係にある。年に数回D息子に除雪機で除雪をしてもらい、Gは時折獲れた魚をAに届けに来る。

C夫妻とは「友達」「家族以上」であり、買い物、除雪、体調不良時等、日常生活の様々な場面で支えられている。隣宅に住むBをはじめとする浜西河住民とは、家庭菜園や民宿Hとの往復の際に見かけたり挨拶をする。

事例2: B [男性-54歳-民宿H勤務-同居-浜西河住民]

Bは西河町で生活を始めて約8ヶ月である。魚を仕入れ加工する業務や釣り客の案内等民宿Hの業務を通じて、漁師を中心に漁港の人と毎日接している。D息子に「Dちゃんは...友達...ご近所(にいたる漁師)だから(魚の加工等)いろいろ助けてもらってる」と同時に「愚痴を聞いてあげる」。民宿Hを頻りに利用する余別町や来岸町の若い漁師とは「みんなよく相談に来る」というように「友達」となった。

漁師以外の民宿Hを利用する客とも顔馴染みであり、調査中何度もBと遊びに来た、父母と共に民宿Hを利用する入舸町に住む少年とも「友達」である。自宅と民宿Hの間を車で往復するBは、徒歩で民宿Hを訪れるAに「車で送るよ」と声を掛けることがある。

事例3: C夫妻 [男性-75歳/女性-70歳-無職-浜西河住民]

C夫妻はD父子と民宿Hの土地の地主であり、毎日様子を見ている。C夫妻はAや来岸町の夫婦、入舸町の一家とほぼ毎日民宿Hの温泉で会う。C夫が最も良くを会話する人物としてBを挙げているように、民宿Hの従業員とも毎日会話をし、酒類を分けてもらうこともある。C妻はO水産加工場に勤務していた時にEと友人になり「(Eと)友達ちゅうか飲むときは(電話をかけ)誘う」というように、民宿Hの食堂等で共に酒を飲むことがある。民宿Hでの入浴から近隣集落の住民や観光客と「飲んだり語ったり物もらったりやったり」するようになって「みんな友達になってしまう」という。

C夫は自治会長を歴任し西河町住民全員と顔馴染みで、年2回C宅で自治会を行う。その他組合長も兼任し、積丹町全体に知人がいる。ウニ漁の時期にD息子を手伝っている。

事例4: G [男性-54歳-漁師-独居-山西河住民]

単独で漁に出るGは、船を出しに浜へ行く際や漁港へ魚を出荷する際に、F母子、D息子や他の集落の漁師と接している。特にD息子とは親戚である他に漁業組合の仕事と共にし頻りに会っている。また漁業組合ではいくつかの部会の部長を兼任している。

漁に出ない日は入浴のための外出が、人と接する機会である。Gは普段隣の集落の町営温泉を利用しているが、月に一度は民宿Hの温泉を利用し食事をしたり、Eを自家用車に乗せて訪れることもある。また、自治会が開かれる際には山西河の住民を同乗させC宅を訪れる。

冬期は余市町等で除雪の業務を通し、近隣集落の人脈が広がり、野菜等を分けてもらう。

以上より、住民は互いに信頼し合い、自発的に協力し合っ

ていることから、豊かなSCが醸成されているといえる。また、住民に共通するSCは 住民全員が所属する自治会、西河町住民をはじめ多くの集落から労働者の集まるO水産加工工場、元来漁村の生活に欠かせない基盤である漁業、観光施設であるが西河町や近隣集落の住民に日常的に利用されている民宿Hの大きく4つ存在することが読み取れる。その他、山西河と浜西河の住民は民宿Hでの入浴以外に殆ど日常的接点を持たず、連絡の手段は主に電話であることが読み取れる。

4.4 つのSCに対する分析

自治会

自治会という形態はフォーマルで共益的なものであり結合型SC^{注2)}に分類することができる。O夫というキーパーソンに依存し長年運営されてきた。自治会単独での行事は既に崩壊しているが、民宿Hと協力し余別地区の祭りに参加している。しかし、浜西河と山西河を日常的に結びつける役割は担っていないといえる。

O水産加工工場

O水産加工工場は積丹町外の古平町にあり、毎日各集落へ無料送迎バスを運行している。漁村農村を問わず多くの集落から女性を中心に労働者が集まり、企業という結合型SCを醸成している。共に働くという経験を通じて「友達」や「知り合い」という関係を集落内外に拡大する可能性を持ったSCである。

漁業

西河町に漁港は無いが、西河町の漁師が出荷する余別漁港の他、来岸、日司、入舸等の漁港では、漁師や仲買人とその家族を中心に人が集まり、結合型SCではあるが、メンバーが従業員のように限定されないことからO水産加工工場に比べ

やや開放的なSCといえる。

民宿H

O水産加工工場や漁業が年齢や健康状態の限定される「働く」という共通の目的を持ったSCであるのに対し、民宿Hは日常生活で行う「入浴する」という目的を持ったSCであり、インフォーマルで誰もがアクセスしうる橋渡し型SC^{注3)}であるといえる。西河町をはじめ近隣集落は温泉地帯であることもあり、自宅で入浴する習慣が定着していない。また、民宿Hは浜西河住民は無料、その他の地元住民も安価で利用できるため、生活に密着しやすいSCであるといえる。

5. 民宿Hの持つSCの拠点性に対する分析

橋渡し型SCである民宿Hは、住民同士に日常的接点を与えると同時に、それまで触れたことの無い社会へとSCを広げる契機にもなっている。また、各々が独立した結合型SCである自治会、O水産加工工場、漁業を連結させる役割を果たしており、民宿Hという主体は住民にとってSCの仲介者であり、民宿Hという場はその拠点となっていると考えられる。

したがって、限界集落においてSCを保持し豊かにするためには、民宿Hのように地域社会と積極的な関係を持ち、誰の生活に対しても開かれた公共性のある空間の存在が重要である。

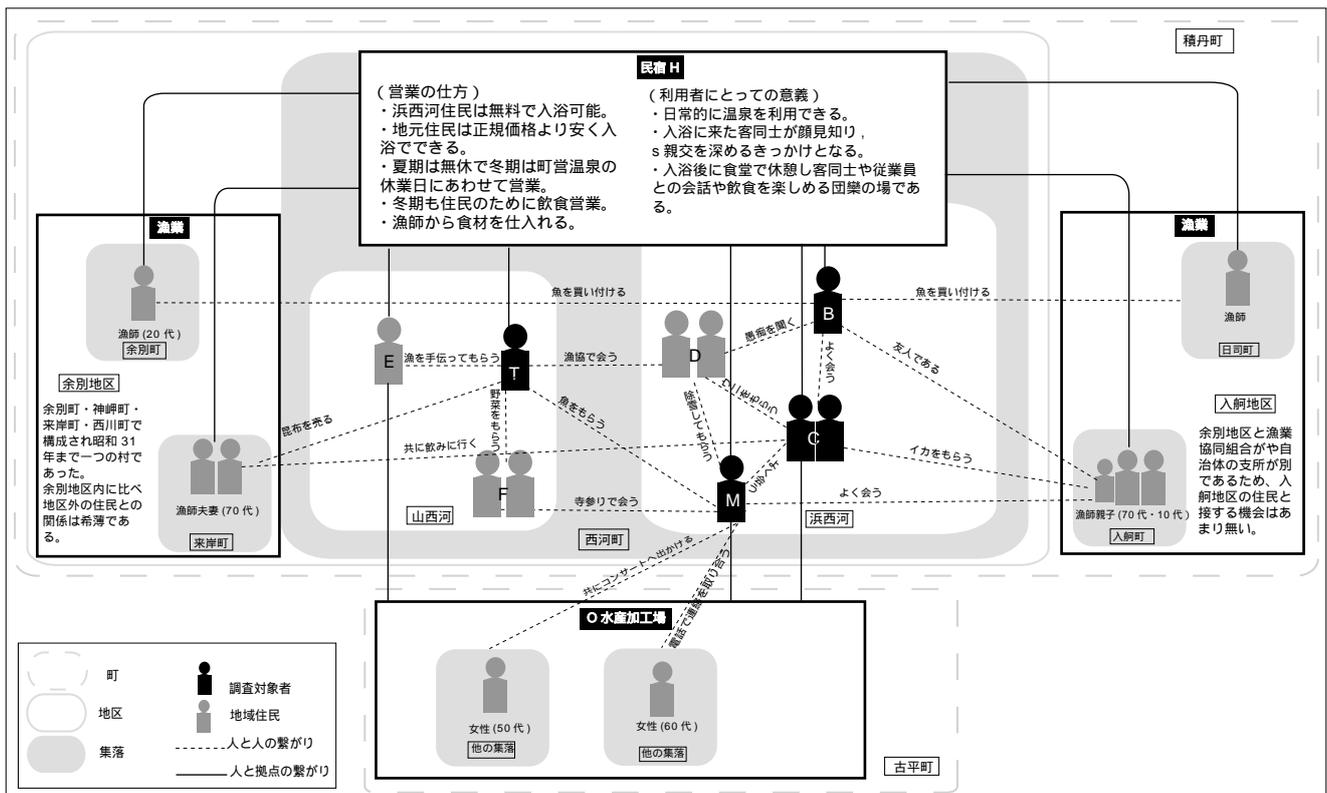
このようなSCの拠点性のある場所に着目し、その機能を持続しより改善できるよう支援するは、限界集落における居住環境を豊かなものにする上で有効であると考えられる。

注釈

注1) 本研究における相互扶助とは、単なる自発的助け合いのみではなく、相手を取り巻く環境や体調、心情の変化に気付く機会となる互いの見守りと考えられる。

注2) 家族のように内向的で厚い同質的な繋がりを強化するSC。(Putnam 2000年)

注3) 外向きの視点で様々な社会の谷間を橋渡しするSC(Putnam 2000年)



* 北海道大学大学院工学研究科 修士課程

** 北海道大学大学院工学研究科 准教授・博士 (工学)

*Graduate Student, Graduate School of Eng, Hokkaido Univ.

** Assoc. Prof., Graduate School of Eng, Hokkaido Univ., Ph.D. in Eng